

今日の社会で宗教を研究する場合、宗教に対してある特定の態度を自覚的にとることは流行らない。かつてマルクス主義が全盛だった頃は、自覚的に宗教を否定することがある種のインテリのインテリたる所以だった。逆にだからこそ、宗教に関係する人々もこれにまけじと宗教のもつ積極的効用を説くことになる。両者とも宗教に対する評価のベクトルは正反対でも、宗教を論じる態度は自覚的だった。

ところが、マルクス主義が往年の元気を失い、宗教自体も次第に「見えなく」なってしまった今日、宗教を自覚的に考えてみようという精神の緊張はすっかり弛緩してしまっているようにみえる。幸い、ホメイニさんや霊界の宣伝マンを自称する役者さんの活躍で、宗教の話題にはことかないが、それらは女性雑誌の星占いのように、その場で忘れられてしまう日常の話題の域を越えることはない。

宗教観の問い直し

山中 弘

こうした状況の中で宗教研究を生業としていると、いきおい既製品を簡単に利用して宗教を料理してすませることもなる。しかし、我々があまり意識しないで使っている「カリスマ」や「聖と俗」といった分析概念が当初は宗教に対するある特定の態度をもっていた人々によって作られ、彼らはそれを使って自覚的に特定の宗教観なり宗教像を描いていたとしたらどうだろうか。宗教を理解しているつもりが、宗教自体ではなく彼らの宗教観を理解していたということにもなりかねない。

そして結果として、何ら自覚もないままに、その概念の内に潜んでいた宗教に対する特定の態度を踏襲することになるわけだ。この陥穽から逃れるために、これまでの分析概念に安易によりかからないで、自分なりに人間と社会に対する宗教の存在の意味をもう一度根本的に問いなおしてみる必要があるのではないか、こんなことを最近考えている。

(やまなか ひろし・愛知学院大学助教授―宗教学―)